

郷土室だより

中央区の海岸線(その二)

◇前号(68号)のあらまし

明治三十九年の三十間堀川改修工事のとき、いまの水谷橋公園(銀座一―一二)辺の地下五mの位置から、長さ約一七mの船の帆柱と思われる巨材が発見されました。

その発見から六五年後の昭和四六年、帆柱出土地点の東側の京橋会館(銀座一―二六)建設工事現場から、またもや、この場所がかつては海岸だったことを推定させる何種類かの出土物があつたこと。そうした事実から約四百年前の中央区の海岸線は、今は全く姿を消してしまつた三十間堀川の川筋だった―という話を中心でした。

◇消えた三十間堀川

ここで改めて三十間堀川について、みて行きたいと思ひます。三十間堀川は「銀座の川」として人々に親しまれ、絵や文章に数多くとりあげられてきました。

ところがこの水路は昭和二三年六月一日に埋立てが決定されて工事が始まり、翌二四年三月中にすべてが埋立てられました。その後東京都はこの新理立地について、何回か指名競争入札をしています。そんな処分上の問題もあつて、法規上の埋立て完了は昭和二七年七月二三日になっています。この日から数えても、三十間堀がなくなつ

て今年には三八年目にもなるのです。

なぜこの三十間堀川が埋立てられたのかといふと、太平洋戦争の末期の東京大空襲で、中央区の大部分が焼け野原になりました。

やがて平和がもどり、人々は町の復興を始めたが、その時いちばん困つたことは焼跡に積み重なつた建物の土台石や焼けた瓦、壁土などでした。当時はそれらを「残土」と呼びました。

いまだすと「残土」処理はパワーショベルやブルドーザーなどで「軽々と」トラックに積み込んで運び出せますが、当時は機械もガソリンもなく食糧不足で腹ペコの人々の「人力」だけで「残土」を片づけなければなりません。

しかしこうした廃棄物の処理は今とくらべ、昔の方が楽でした。中央区の場合、この時の「残土」処理場は、なんと昭和通りでした。関東大震災の復興事業の「目玉」的存在だった昭和通りは、自動車がなかった交通量の少なさもあつて、残土棄場にはピッタリの場所だったのです。

ところが、この東京一、ということは一は本一の大道路の昭和通りに、るいては残土の山が続く風景は、占領軍にとっては非常に目ざわりなものでした。それは日本の事情をあまりよく知らないアメリカ本国からの視察者が、占領軍当局は東京都心の管

理をあまり熱心にやっていると悪いと思ひ込みかねない風景だったからです。

そのため、占領軍は昭和二三年四月一日に東京都に対し、残土片づけを命令しました。命令を受けた東京都は機械も車もガソリンも無いため、手近かな江戸以来の水路に残土を投げ込むことで、命令にこたへました。そしてこれは都心の戦災跡地の清掃と取りかたづけと、新しい「陸地」の造成を兼ねた、当時としては一石何鳥もの効果的な作業だったのでした。

なおこの時の中央区内の埋立て状況はつぎのとおりでした。

河川名	埋立開始	埋立完了
東堀留川	23・4・4	24・8・31
竜閑川	23・4・4	25・3・7
新川	23・4・1	24・12・20
三十間堀川	23・6・1	27・7・23
浜町川	23・—	25・3・7

◇『朝日新聞』の記事

右の表の三十間堀川が法規的に埋立完了する前の約半年前、つまり昭和二七年一月一四日づけの『朝日新聞』は、旧三十間堀川の状態をつぎのように報道しています。

記事を引用する前に二、三つくわえますと、見出しの「第二銀座」とは、現在の中央通りに面した商店街が「第一銀座」であり、三十間堀跡地を「第二銀座」と呼んでいたものです。

記事を読みすすめばわかるように、当時

図1 海岸線の変化



の「高層ビル」とは三階から六階建てくらいを指していたことがわかります。なお大部分が三階建てだったことはいうまでもありません。

つぎに東京の露店は、これも占領軍の命令で、昭和二六年一月三十一日にすべて取り払われました。

東京中の露店はそれぞれの地域ごとに、まとめられた場所や施設に収容されました。銀座の場合はちょうどタイミンダがよく、三十間堀埋立地に引用記事にもあるように、四五〇軒の露店が入るビルの建設が進行中でした。このビルが出来るまでは銀座の露店

は、数寄屋橋南北公園に仮営業所をつくって収容されてきました。

さらに都の三十間堀埋立地の売り出し価格は、当時としては相当に高いものでしたが、今考えてみればまるで夢のような値段でもありません。

それでは記事を引用しましょう。

「第二銀座に高層盛り場」
東銀座一―八丁目を横に貫く約六〇〇坪の三十間堀埋立地は、一時雑草と堀立小屋に覆われていたが、埋立後四年目の現在は三階以上のビルで完成したもののニュー・ギンザ・

ビルをはじめ一三、目下工事中のもの一二という盛況。このうち銀座露店デパート、銀座センター、三原橋地下の総合娯楽場など八つのビルは四月までに完成、近代的な商店、オフィス、娯楽場、劇場として一斉に開場し、高層建築の盛り場として第一銀座の繁華を奪おうという意気込みである。

この埋立地は東京都が最初坪当り平均八〇、〇〇〇円、安い所は三六〇〇〇円で売り出し、サッパリ買手がつかなかったものが、昨年この娯楽施設が大いに当てるとトタン

に申込みが殺到し出したもの。

三原橋を中に新橋側は東京温泉、コニー映画劇場、地下ホール、キャパレーなどが昨年までに出現、隣りの三原橋わきの一角には、まだ建築許可がおりていないが、六階建の映画館、遊技場、ダンスホール、飲食店などを収容するビルが計画されている。京橋寄りの三丁目と新橋に隣り合う七、八丁目は十条製紙、第一ビル、ニュー・ギンザ・ビル、新聞会館などのオフィス街、また一、二丁目は全部銀座、京橋の露店四五〇を収容するデパートの工事が進んで

いる。東大丹下教授の設計で、地下一階地上三階が三棟、延三、五〇〇坪、外側は全部ガラスの明るいもの。

三原橋下の総合娯楽場は新東京観光会社が建設中で橋下三〇〇坪を利用、通路をはさんで建

物二棟を向い合せて建て、一方は戦後初のニュース映画専門館、向い側は米国品販売店とテレビ、観光、物産関係の案内所とする予定。(二七・一・一四付『朝日新聞』から)

◇三十間堀川の原形

姿を消してから四〇年たらずのいま、かつての三十間堀(以下「川」を略します)の場所に、どの位むかしの堀のなごりが残っているかを、『住宅地図』(ゼンリン89年版)でたどってみました。ところが三十間堀に関係ある地名と施設名は、あわせて四カ所しかありませんでした。

一カ所は前号でとりあげた明治三九年の三十間堀つけかえ工事の現場の水谷町にもなむ「区立水谷橋公園」(銀座一―一二)と、晴海通りにかかつていた三原橋を利用した「三原橋地下街」(北半分が銀座四―八、南半分が銀座五―一〇)と、かつての橋の北東づめにあった築地警察署の「三原橋派出所」(銀座四―九)が、いままも位置を変えずにガンバっています。それと「パチンコミハラセンター」(銀座五―一〇)の四カ所でした(なお三原橋地下街に「三原」のついた店が二カ所あります)。そしてかんじんの三十間堀そのものを示す地名なり呼称は、ひとつ

もなくなっていました。

わずか四〇年たらずの年月でこの有様です。四百年もむかしの三十間堀の原形をさぐることは、なかなか大変なことがおわかりでしょう。

まず原形がどのように三十間堀という水路に変わっていったかを、前頁の図1―I 模式図でごらんください。

図1―(A)は三十間堀に限らず、江戸前島を中心とした、中央・千代田・港三区にまたがる原地形をしめします。

図1―(B)は慶長八年から十一年(一六〇三―一六〇六)にかけて行われた最初の天下普請で、日比谷入江(現在の皇居外苑からJR新橋駅にかけた一帯の入江海)を埋め立てた時の状況です。この時江戸前島には京橋川(図の上端)やそれに続く、のちに外濠と呼ばれた水路が掘られました。またそれまで日比谷入江の西岸を通っていた東海道は、現在の位置つまり新橋―京橋そして図にはありませんが日本橋にいたる線にかえられました。

図中の二つの×印は、前号でとりあげた水谷町と京橋会館の位置を示します。

図1―(C)は、(B)のようにいったん埋め立てた場所に、改めて江戸城の外濠を掘ったり、市街地の中の水路づくりをしている状況を示します。

とくに三十間堀の場所は、本来の海岸線の沖合いに護岸用の石を並べて、その石の列から東側に埋め立て地をつくりはじめました。つまり三十間堀は江戸前島の東の海岸線を「埋め残して」形成させた水路だったのです。

◇武州豊嶋郡江戸庄図

図1のような模式図ではモノ足らないと思われる読者のために、こんどは『武州豊嶋郡江戸庄図』一名を『寛永江戸図』とも呼ばれている有名な地図を中心に、三十間堀をみて行くことにしましょう。

その前にその地図がなぜ有名かといいますが、現在知られている限りでは、都市としての江戸の全体が描かれている地図はこの図が最古のものだからです。

さらにこの地図は江戸時代から実に多くの人々によ

り、くわしく考証が重ねられて、地図の内容が寛永九年(一六三二)当時のものであることが、多くの研究者によって立証されているからでもあります。

膨大な量の江戸図を徹底的に調査して、その所蔵者まで明記してある著書に『江戸図の歴史・別冊江戸図総覧』(飯田竜一・俵元昭共著 築地書館一九八八年刊)があります。この著書

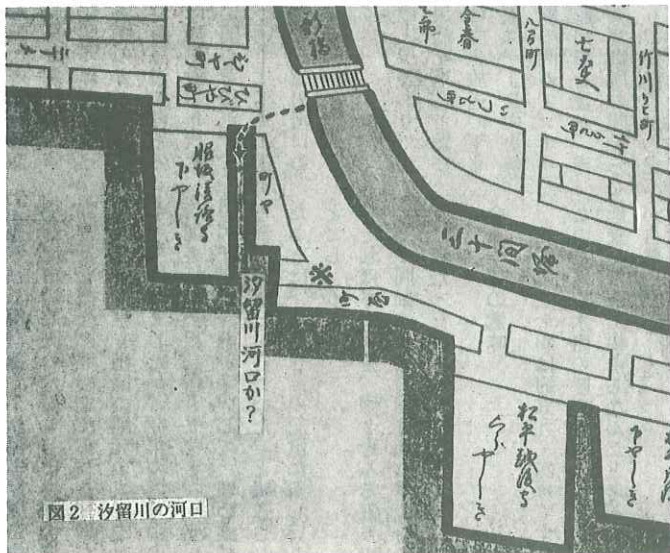


図2 沙留川河口

で『武州豊嶋郡江戸庄図』（寛永江戸図）の部分のみならず、刊記年・図名・編者等・刊行者などの相違により、二七種類もあることが明らかにされています。

二七種類といっても、原図である地図を手で写し書きしたものを写図が一五種類、原図または写図をもとに木版に刷ったものが七種類、石版刷り一種類、さらにそれぞれの複製でありながら微妙に相違のあるものが四種類あることが、この著書によってわかります。

この「郷土室だより」で利用した図は『江戸図の歴史・別冊江戸図総覧』の表現に従えば、寛永九年申十二月「武州豊嶋郡江戸庄図（内題）武州豊嶋郡江戸庄図」寛政二年庚戌五月三日、近藤守重題の図を複製した『古板江戸図集成』巻一と、同じ複製の『東京市史稿』市街篇第一附図を使用しました。

◇ 汐留川のはなし

この三五八年前の地図をみますと、いまの銀座七〜八丁目のあたりの場所に「三十間堀」と書かれています。

そして三十間堀の東（図では下側）にわずかの「町屋」と大名の蔵屋敷や下屋敷があり、その東はもう海岸にな

っています。この図が書かれた寛永九年当時の海岸線の位置は、もちろん正確ではありませんが、図2のこの部分に限れば、昭和通りからいまの築地川を埋立てた高速道路のあたりだといえましょう。

次号でも『武州豊嶋郡江戸庄図』を利用して、中央区内の本来の海岸線と埋立地Ⅱ築地を、さらに広範囲に紹介して行く予定ですが、なにはともあれこの地図にえがかれた区内の「築地」は、埋め立て中の状況または埋め立てられたばかりの姿を示しています。

図2の「新橋」のところから港区の部分を見ますと、「ひびや町」から始まる東海道の町並みのすぐ東側は、もう広々と芝浦の海が続いています。

——ここまで書いてきて、改めて図2をよく見ますと、アララッ、今は消えてしまった汐留川がえがかれていません。

本来だと図2の「新橋」と「三十間堀」と書いてある下の部分に、二つの「町屋」（木挽町）がありますが、その中間の※印のあたりに、汐留川の河口があるはずですが、

しかしさらに図2をよく見ますと、川は当時の「新橋」南東から、私に図に仮に点線を入れたように「ひびや町」の北端をかすめて、木挽町の「町屋

」と「脇坂淡路守下屋敷」の間から海に注いでいるように見えます。

『武州豊嶋郡江戸庄図』は前にのべたように、まるで「考証のカタマリ」のような地図ですが、考証者のほとんどが、主に大名・旗本の屋敷の年代による位置の変化にしか関心を持たず、当時の自然的条件については案外に無関心だったことが、この汐留川河口の考証がなかったことでわかります。

汐留川の概略は、図1のとおりですが、念のためにその川筋を地名で結びますと、新宿区四谷の文化放送の下まで入り込んだ谷を水源に、JR中央線の信濃町駅と四ツ谷駅の間のトンネルの西側の入口の下の鯉河橋を流れ、港区元赤坂の迎賓館と東宮御所の間から赤坂見附の外濠となり、弁慶橋から虎門までは、途中にいまも名の残る溜池（ある時期にはこの附近の上水道の水源と、外濠を兼ねたもの）と呼ばれた広々とした水面となり、虎門から内幸橋―土橋―新橋―蓬萊橋―汐先橋―南門橋を経て、浜離宮庭園と中央卸売市場の間を流れて、海に注いでいた川です。現在は赤坂の外濠と浜離宮庭園に沿った部分だけ残して、跡片もなく埋め立てられてしまいました。

残された河口部——浜離宮庭園と中央卸売市場の間の水面も、市場の大改築事業を機会に埋め立てられる計画があつて、銀座や港区の地元の人々をヤキモキさせましたが、今年の六月中の新聞各紙の表現を借りますと、「当局のズサンな計画が幸いして」埋め立てられないことがきまった、と報道されたことは、みなさんの記憶に新しいことでしょう。

それはさておき、図2をみる限りでも三十間堀の東側の埋立地のすぐむこうは海だったことがわかります。

◇ 三十間の意味

長さの三十間は約五九・四mです。この長さを水路の呼び名とする場合、延長ではなく幅にちなんだと考えるのが自然です。

ところが明治以来の縮尺の正確な近代地図や、橋の一覧などをみますと、三十間堀の川幅は平均して約一五〜六間（約二九〜三二m）しかありません。つまり三十間の半分しかないのです。そこで江戸期の地誌を調べますと、たいていの資料には「川幅三十間」になむと書いてあります。

そして『東京府志料』（明治五年調査）中の「河渠志」をみますと「京橋川筋ヨリ新橋川筋（注Ⅱ汐留川）ニ至

ル横堀ナリ(中略)往古ハ川幅三十間ニ掘割シニ由テ名ヲ得タリ 文政年間兩岸ヲ築立シヨリ川幅狭クナレリ」とあります。

この「文政年間」をたよりに、幕府が調査して作成した『御府内沿革図書』をみますと、その第二篇に文政一年(一八二八)に、川幅を約半分に狭くした図が出ています。

なぜ輸送の大動脈である水路の幅を半分にしたのかは、説明がありませんが、その代りに水路の兩岸の河岸地の面積は、一部をのぞいて倍以上にふえています。

『武州豊嶋郡江戸庄図』の時点からかなり時代が下がると、三十間堀は市街地の中の水路となり、その兩岸は築地側に東豊玉河岸、銀座側に西豊玉河岸という河岸が成立しています。

この場合の河岸地とは、たんなる河岸の土地という意味ではなく、今も残る「魚河岸」という表現のように、物資の流通を行う市場の機能を持つ場所でした。

そもそも「銀座」とは幕府の管轄下にある銀貨造幣局を意味するものですし、明治以後、文明開化の先端をはしる商店街になるまでは、現在の「銀座八丁」の大部分は職人町の要素の強い地域でした。この造幣局や職人の工房

に対する物資の供給と製品の搬出に、西豊玉河岸は重要な役割を果しました。

東豊玉河岸の方は、埋立地築地に対する物資の需給基地としての役割を果していたのです。そしてこの二つの河岸地が、俗に「化政期」(文化・文政期)と呼ばれる、江戸文化の最盛期を迎えた時点で、面積が倍増しているということは、この三十間堀を中心に「銀座八丁」はじめ、広大な「築地」の埋立地が、新開地から都市として成熟した地域になったことを物語るものだったのでしょう。

◇日本橋台地

中央区の海岸線の原形を追跡しているうちに、汐留川に「脱線」したり、江戸末期に三十間が十五間に狭くなっ

た話になってしまいました。ここでまた改めて「原形」調べにもどることにします。まずこの項の見出しの「日本橋台地」について、つぎのような引用から始めましょう。

上野の台地、本郷の台地、麴町の台地などという言葉は、東京ではと

台にみえるし、本郷の台地も不忍池からは高台になっている。つまり、これらはいわゆる山の手の台地の一部である。

しかし、日本橋の名は知れわたっているが、日本橋台地の名はふつうには知られていそうもない。それもそのはずで、日本橋台地というのは、地下に埋もれている台地の名前なのである。

このような書き出しで「日本橋台地」の成因を説いているのは、『富士山はなぜそこにあるのか』(貝塚爽平著丸善株式会社 一九九〇年刊)の第一部第六章です。この著者は東京の地形・地質に関する決定版である『東京の自然史』(紀伊国屋書店刊)も書いていて、東京の自然史に関心を持つ人々には、いまさらここで紹介する必要もないくらいになじみ深い方です。

できれば、この章全部を引用したいところなのですが、ここでは著者のお許しを得て、以下をつぎのように要約引用させていただきます。

日本橋台地というのは、駿河台の南端、淡路町付近から東南にのび、日本橋、銀座と南にむかい、隅田川をこえて晴海方面に達するもので、

これは中世に江戸前島と呼ばれた半島状の砂州とおおよそ一致している。(中略)道灌が築いた江戸城はいまの皇居の北東部、江戸城本丸のところであって、前島との間には、日比谷入江と呼ばれる、漁船をつけるに格好の入江があった。この入江はいまの日比谷公園から皇居前広場へと入りこんでいたものである(図は省略し引用者)。

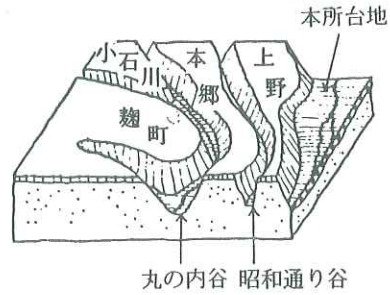
以下、江戸前島付近の工事現場で著者が実際に確認した地層のことや、ボーリング調査の話があり、「日本橋台地」は「丸の内谷」と「昭和通り谷」の間の台地だという説明を、次頁の図でよりわかりやすくされています。

この図(引用者注し図3のこと)は日本橋台地の生いたちを推定して模式的に書いてみたものである。

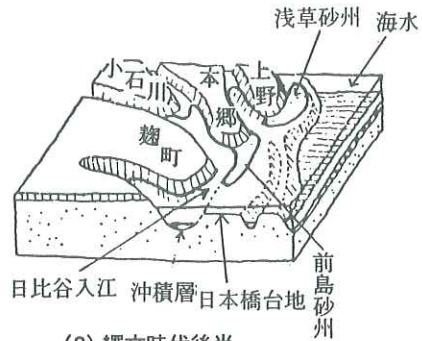
図(1)は、いまから約二万年前の、氷河大拡大期の東京都心部の様子である。このとき海水はいまより一〇

メートル以上も低下し、東京湾はすっかり干上っていた。この干上がった陸地には、当時の利根川、荒川などを合わせた大河(古東京川)が流れていたが、東京の土地は、この大河にむかって流れこむ多くの支流

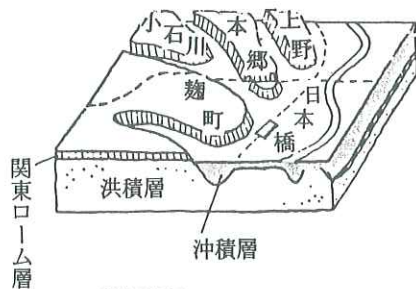
図3 日本橋台地の生いたち



(1) 約2万年前



(2) 縄文時代後半



(3) 現在

によって谷をきざまれていた。その谷の一つが丸の内谷であり、一つが昭通通り谷である。

その後、氷河期が終って後氷期となり、海水準は氷河の融水によってほぼ今日の海面まで上昇した。図の(2)はおよそ縄文時代後半の、海面がほぼ現在の海面に近くなった時期の有様を描いている。海面の上昇とともに新しい海岸の土地は波の力によって削られはじめるが、日本橋台地は、こうして波によって削られた本郷台地の南の部分にはかならない。さきに見た東京駅、有楽町駅付近の日本橋台地上の粗い砂層は、このときの波の作用による堆積物であり

具殻が破片になっているのは当時の波の荒さを物語っている。日本橋台地の平坦さは、このように海の波によって侵食された、いわゆる波食台のたいらさに由来する。その後、この台地上に砂州が形成されて、前島ができたのである。

最後に、丸の内谷のなかに入りこんでいた入江は埋立てられて陸地となった(図の(3))。その結果、平坦なひと続きの下町低地が作られ、地下に日本橋台地や丸の内谷の凹凸ある地形が埋もれていることがすっかりかくされてしまったのである。

(後略)

◇偶然の一致

引用が長くなりましたが、図3(2)で「前島砂州」と線で指定されている部分が、これまでとりあげてきた三十三間堀の線にはかありません。まったくの偶然なのですが、この「日本橋台地の生いたち」図は、このシリーズにとって「百万の味方」を得たおもしろいです。それにしても図1は四百年間の地表の変化を、図3は二万年間もの中央区の地下を含めた立体的な変化をしめす図としてみますと、改めて自然の「おもしろさ」がせまってくるようです。

T・W・F 三芳 亘

— 郷土室より —

35ミリに凝縮された想い出の東京189枚
60年にわたり東京を撮り続けておられる写真家の師岡宏次先生から当室に一八九枚の写真が寄贈されました。この写真は、検索用として当室のために特別作成されたもので、引き伸ばさず35ミリ判(24×36mm)のまま焼きつけてあります。

昭和9年から47年までの銀座、浅草、芝などの町々を撮りためたもので、47年出版の写真集「想い出の東京」に収録された写真に加え、未収録のものが48点含まれています。特に昭和10年代の東京の日常の姿を写した写真は珍らしく、「写真のネガを戦災で焼くこともなく、完全な状態で保持できた」(「想い出の東京」序文より)貴重な写真の数々からは24×36mmの画面から50年以上も前の東京が鮮やかに甦ります。例えば昭和13年、まだ江戸の佛が残る牛込の屋敷街や露地、長屋、店先の風景。昭和20年9月撮影の銀座の写真には、爆撃で壊れた服部の時計塔や防空壕の残骸までくっきり。

この写真は「師岡コレクション」として当室で保存し、公開いたしますが複製、転載等の利用には、先生の許可が必要となります。